天天中文シリーズ講座：中国語でキャリアアップ！

「中国語でキャリアアップ！」は中国でキャリアを発展させる各界の方々に、仕事の現場や中国語学習法についてお話を伺う「天天中文」のシリーズ講座。中国の各界で活躍する皆さんに、仕事や生活のリアル体験をお伺いします！

第 14 回（2023 年 3 月 3 日）ゲスト：斎藤淳子さん

ライター。北京在住26年。米国で修士号取得後、北京、人民大学に国費留学。JICA 事務所、北京日本大使館勤務を経て、北京を拠点に執筆活動を開始。時事通信、読売新聞ほか、中国の雑誌『瞭望週刊』など幅広いメディアに寄稿。NHK ラジオや J-WAVE、TBS ラジオなどでも中国の現地事情を解説している。23年2月『シン・中国人―激変する社会と悩める若者たち』を上梓。共著に『夫婦別姓―家族と多様性の各国事情』『在中日本人108人のそれでも私たちが中国に住む理由』がある。

天天中文：斎藤さん、今日はお忙しいところありがとうございます。今日オフ会にご参加の方はすでに斎藤さんの本を読んでいらっしゃる方も多いと思いますが、もっと詳しく知りたい方もいらっしゃると思うので、これまでのキャリアについて少しお伺いしたいと思います。中国には２６年前にいらしたのですよね？

斎藤：そうですね。1996 年の夏、北京に来ています。その時は国費留学生のプログラムに応募して、人民大学国際関係学部国費留学生として中国政府からの招待を受けました。日本政府と中国政府が交換で行うもので、日本でも中国からの国費の留学生を受け入れる代わり、中国も日本からの留学生を受け入れるというプログラムで、2 年間北京に留学することになりました。

天天中文：なぜ中国だったのでしょうか？

斎藤：その前はアメリカの大学院でアジアの国際政治経済の研究をしていて、その時から中国と取り組むことになったのです。中国語もアメリカで始めました。今回の本、『シン・中国人』ではそこまでは書いていないのですが、私は 93 年からアメリカに行っていて、その時に中国人のものすごく優秀な人たちに出会って、もうびっくりして、この人たち、いったい何なんだ？と驚いたのが、そもそもの始まりかと。アメリカに行く前はヨーロッパの政治経済体制やアメリカの黒人史などを研究していて、中国とは関係なかったのですが。

天天中文：政治経済学の切り口で世界を見てらしたのですね。

斎藤：そうですね。その頃は国連に行って仕事したいなと思ってたんですね。

天天中文：それが、なんともう中国で 26 年なんですね?

斎藤：そう、まさか、まさか、です。

天天中文：私自身も 89 年に起業派遣で中国に留学にきたのが始まりで、商売では嫌なこともいっぱいありますが、魅力的なことも良く分かります。人が汗をかきながら本能で生きてる！という感じで。そのころから現在への変化も凄いものがありますが。

最近、私の友人で３０代の男性なんだけど、いい関係だった女性と別れた、という話をきいて。その主な理由が二人の「差」なんです。男性は地方出身で、女性は北京出身、彼は身分格差っていう言葉は使わないけど、所詮無理だよ、っていう感じで。

斎藤：それは可哀そうですけど、考えてみれば戸籍の問題って関係ないんですよね。影響がでるのはその子供だけですから。彼女から見たら北京戸籍の人と結婚しても、地方戸籍の人と結婚してもそこは変わらないわけですから。

天天中文：だけど、戸籍だけの問題ではないですよね。女性は、北京の大学を卒業後、イギリスに留学していまは北京で大学の講師をしていて、結婚する男性ならば北京のマンションや高級車をもっていて当然、という考え方だそうで、いろんな「差」がからみあって、彼は俺はもういいや、と諦めちゃったようです。僕から見れば本当にいい男なんですが。

斎藤：そうですね、やっぱり、そういうものが実際に現実としてありますね。それを乗り越えていくっていうのが彼らにとっては障害ですよね。愛ってことを考えたらものすごい障害ですょ。

中中天文：斎藤さんのお家は、お嬢さんと息子さんのお子さんが二人ですよね。心配はいろいろありますか？

斎藤：それはもう、後は彼らの人生ですからね。私は逆にそこに踏み込むつもりはないです。飛び立ってほしいですね。

中中天文：まあ、日本人だから、それは普通そうですよね。親はね。中国の場合は、親が子供の人生にものすごくコミットしますよね。

斎藤：コミットし過ぎですよね。1 人っ子っていうのも本当、気の毒ですよね。2 人、3 人いたら全然違いますよ。セカンド、サードチャンスがあれば、まあいいやと思いますもんね、

親はね。なんせ心理的には失敗できないって思う。ゲームなどでもそうじゃないですか。3回投げられると思ったら、1回目は別に失敗してもいいと思えるでしょう。一人じゃ、無理です。

天天中文：確かにそうですよね。1回勝負だときついところある。

斎藤：それが全てを壊しちゃいますよね。子供に成功してもらいたいと思うのは、親の使命として当然なんですけど、絶対失敗させられない、後にも先にもこの子しかない、と思っちゃうと、もう深く入り込み過ぎちゃうんですよね。勉強のこともそうですし、就職も、結婚なども特にそうですよね。無理矢理、親の条件を押し付けるから、そんな結婚がもつわけないですよね？ 離婚率はもう日本のほぼ倍ですからね。結婚全体の比率は、まだ日本より若干高いんですけど。

天天中文：中国は結婚もするけど離婚もするってことですよね？

斎藤：はい、そういうことですね。

天天中文：結婚しなきゃいけない、という既成概念はすごく強いんですね。

斎藤：ものすごく強いですね。親がもう、結婚しないとまともな人間じゃない、みたいな勢いなので、じゃあ結婚さえすればいいんでしょう？ みたいな感じになって、してやるわよ！と喧嘩腰みたいな人もいたり。結婚しない、ということで親とひどく緊張した関係になってしまったり、そういう話はよくありますよね。

天天中文：偽装結婚の話もききますね。

斎藤：偽装結婚もありますね。多数ではないですけど、そういう話も聞きますよね。

天天中文：斎藤さんは、JICA や大使館でのキャリアを経て、ずっと中国を見てらっしゃるわけですが、こうした若者たちの変化は大きいものがありますか？

斎藤：本にも書きましたけど、若い人たちは、まあ基本的にノンポリですよ。なんだかすごく日本の若者と似てきてると思いますね。自分の趣味は持って、好きな音楽や日本のアニメなど、ひと昔前とは違って自分の好きな世界をそれぞれが持ち始めている。そういうものを大切にしたいという意識がある。そこから来る一つの独立した個人の尊厳をもうすこし尊重してもらいたいっていところがありますね。例えば好きなファッションをしたいとか、まあ単純なことですよね。でもそれが今の中国では男性のピアスが駄目とか、いろんな規制がありますよね。楽しくやりたいのに、クリスマスもおおっぴらにやっちゃいけない、とかですね。だからそういうところでぶつかるところは持ってるけど、ポリティカルなものではな

いですね。かつて 80 年代末の学生運動に参加した人達は、日本の戦後の学生運動にも共通するものがあって、大きく時代が転換した時期に、海外には民主主義というものがあって、素晴らしい、俺たちがそれを担っていくんだみたいな自負もあったし、そういう人達は非常にラジカル、中国のなかではものすごく問題意識がある世代だと思います。その運動は挫折してああいう形になったわけですけど、それを捨てずに頑張ってるコアな人達というのは、今の中国経済を作ってきた人でもあるから、それは大きな潜在力ですよね。いまは声高にはいえないので皆、沈黙していますけれど。

天天中文：なるほど、ですね。

斎藤：それ以外の人たちは、だんだん年齢が下がるにつれて骨抜きになってきている、というか、日本でも、そうですよね？ 戦後すぐの知識人たちは日本の戦争を骨太に反省して日本の知識界を作ってきたところもあると思うんですけど、それが若くなってくるとだんだん薄まってくるみたいなところは似ていますよね。

天天中文：ありがとうございます。それでは今からはオフ会に参加の会員の方々から自由に質問をいただきたいと思います。まずは、第一問、なぜこの本『シン・中国人』を書こうと思われたのでしょうか？

斎藤：はい、理由は、三つあるんですけど、一つは、ドキドキとオドロキ。そしてイライラですね。まずもともとの経緯は同じ筑摩書房という出版社で２１年に『夫婦別姓』という本を出したんですね。これは七カ国の事情をまとめていて私は中国担当で参加して、中国の夫婦別姓の実態、その背後にある歴史などを書いたんですけど、その担当編集者の方が読んですごく気に入ってくださって、一人で１冊、中国の今が分かる本を書きませんか？ と声をかけてくださったんです。ちょうど去年の今ごろでした。その時、編集者の方は中国の政治がわかるものをおそらく想定していらしたのかもしれないですが、当時はもう世界中の人が皆疲れて、精神的にも嫌になっちゃってて、そういう時期に、中国の政治のドロドロの実態を書くのは私自身も本当にしんどいなと思って。そうではなく、自分も興味を持ちドキドキできる、皆も読んでなにか少しでも気持ちが明るくなるようなテーマはないかなと考えて。でも、中国の現在は、複雑でとても書きにくいんですよ。だからもう下手に書くぐらいだったら書かない方がいいっていうぐらいの感じで、やめようかななんて思っていたんですけど、春になってポカポカしてきたらですね、もしかしたらドキドキできる楽しい切り口かもしれない、と「恋愛と結婚」というのを思いたんですね。

天天中文：そうなのですね。

斎藤：そこがまずドキドキできるっていうところで。このテーマだったら老若男女、誰でも興味を持つ永遠のテーマですよね？ ここからこの分かりにくい国を掘り下げて下げていっ

たら面白いんじゃないかな、って思ったのです。そして、やはり日々の驚きですね。例えば中国では最近、お一人さまむけの、カウンターだけがずらりと並んだレストランができていますが、そんなものはまあ昔は全然なくて、新人類が生まれて激変している、ということは、この３、４年のものすごく感じていたところなんですね。私たちが 90 年代に感じていた、あの中国の人達、骨太で何でもガンガン乗り越えていくすごい人達とは全然違う、新しい中国人になってるなっていう衝撃を最近ずっと感じていて。それも書きたかったことですね。では「イライラ」っていうのは、何かっていうと、日本では、中国の情報というと、どうせ最悪なんでしょ、よくあんなとこに住んでいるね、という感じで。まあそれも確かにあるんですけれども、それだけじゃない。でもとにかく個々人の顔が見えない中国の情報の伝わり方に対してのイライラっていうのは昔から感じていました。

それは 2012 年秋の反日デモの翌年に『在中日本人 108 人の　それでも私たちが中国に住む理由』を作った理由でもあるのですが、まあとにかく顔の見えない中国っていうのではなく、個々人はどう考えて、どう悩んでどう生きてるのとか、ということをもう少し日本の人に分かりやすくきちんとお伝えしたいな、というのは、私がここで物書きをしている使命として、いつも感じていることですね。このドキドキと驚きとイライラが『シン・中国人』の出発点ですね。

＊＊＊＊＊＊

この後、中国語や勉強法についてさらに交流が続きました。

文・天天中文